

# 第 17 号

発行日 平成29年 2月24日  
 発行者 〒036-8561 弘前市文京町3  
 理工学部同樹会(理工学部内)  
 題 字 同樹会長 千葉 信行  
 印刷所 株 笹 軽 印 刷

# 理工学部同樹会報



## 「心から感謝」

山上 佳男

(昭和四十八年  
理工学部数学科卒業)

私は、昭和四十四年四月、弘前大学理学部数学科に入学しました。理学部発足から五年目の年と記憶しています。が、あれから五十年近くの月日がたつてしまったことに改めて驚かされています。

あの当時は、東大や日大などの学園紛争から全国に拡散した「全共闘運動」や、昭和四十五年の日米安保条約自動延長やベトナム戦争に反対する「学生運動」が盛んな時代でした。そのため、私たちの世代は「全共闘世代」とも呼ばれています。

入学一年目は、弘前大学にも学園紛争が飛び火し、授業がストップすることもありました。が、二年目にはその紛争も下火となり、後期からは「教養部」から「学部」へと進むことになりました。

教養科目から解放され、数学科に没頭できる時間がより確

保できるようになったことに加え、若くてフレンドリーな先生方が多くいらっしやったことで、より一層楽しく充実した学生生活を送れるようになりました。

講義中に限らず、研究室や当時あった数学科事務室に入り浸っては、先生方と専門分野については勿論、それ以外のことでも、気軽に質問したり相談したりすることができました。

また、先生方のご自宅に押しかけては、夜遅くまで「食べ放題・飲み放題」を何度となく繰り返し返したりもしました。生意気な私たちに、人生の先輩として優しく接してくださった先生方やご家族の皆様には、いくら感謝してもし尽くせないほどの思いで今でもいつばいす。

そのほかに、バス遠足やソフトボール対抗戦そして打

ち上げ、また忘年会、新年会、追いコンなど、先生方と学生の交流の場は、たくさんありました。また、そのたびに多くの参加者で盛り上がり、先生方や他学年との親密さも、ますます強くなっていったと思っています。

これらの経験があったからこそ、社会人となつてからも、職場の同僚や後輩たちとは勿論、先輩の方々とも、臆することなく気軽にコミュニケーションをとることができたと思っています。

さて、平成六年、理学部数学科元教授の土田喜輔先生が、叙勲されたことを機に、是非皆で先生を囲んでお祝いしようということになりました。

理学部数学科発足以来、それまでは学年やゼミ単位で集まることはありましたが、学科全体で集まる機会はありませんでした。そこで、同窓生一同を集めるためには、文理学部の大先輩方を含めた「理学部数学科同窓会」として活動することが必要だということになりました。

最初の作業は、最新の名簿作りからでした。過去の「理学部同窓会」名簿を頼りに、

各卒年の代表者をこちらで決め、その方に同期の現住所調べなど依頼することにしました。果たして、皆から快く協力が得られるものかと不安もありましたが、実際は誰からも断られることなく、短期間のうちに名簿を完成することができました。

このことは、数学科同窓生の親密さ・絆の強さを、改めて思い起こさせる機会でもありました。

それ以降、元教授の畠山先生をはじめお世話になった先生方の退官などの機会には、「理学部数学科同窓会」主催の「祝う会」を開催してきました。この会には、毎回多くの方に参加いただき、現在まで続いています。

ところで、昭和四十年に発足した理学部も、平成九年には理工学部となり、昨秋には、「理学部・理工学部創設五十周年記念事業」が開催されました。

また、理学部「数学科」も、その後、理工学部「数理システム科学科」から「数理科学科」へ、そして今年度(平成二十八年度)からは「数物科学科」へ改組となりました。私は、平成二十二年三月に、

退職しましたが、高校教員として県内に勤務していたことから、高教研をはじめいろいろな研究会や会議などで、弘前大学の先生方とお会いする機会に恵まれてきました。時には、高校現場からの意見などを求められることもありました。

このように、私にとって弘前大学は、単なる出身大学としての存在以上の大学であり、現職時代を含め半世紀近くにわたりお世話になってきた大学であり、心から感謝しております。

また現在、縁あって、教職免許に関わる講義を担当する機会をいただいております。これまでお世話になったことへのせめてもの感謝と後輩たちへのエールの気持ちを含め、微力ながらもやらせていただいております。

さて、理学部から理工学部へと拡充が進む中で、学生数も増え、建物も見違えるほどに立派になり、理学部発足当時とは比べものにならないくらいの大所帯となりました。こうした中であって、「会員相互の親睦を図り、大学の発展に寄与すること」を目的とする「理工学部同樹会」の

存在意義は、ますます大きいものと考えています。

同窓生の一人として感謝の意も込め、本会の発展のために今後とも協力して行きたいと考えているところです。



平成二十八年度末をもって、地球環境防災学科 有賀善和教授、機械科学科 飯倉野俊郎教授の四名の先生方が退職されます。ご退職の先生方におかれましては、永年にわたる教育研究活動、及び同樹会に対するご尽力に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

に、今後益々のご活躍と同樹会への変わらぬご支援を宜しくお願い申し上げます。なお、先生方から本学部における様々な思い出や出来事に纏わるお言葉を頂戴しました。在学時代にお世話になった先生のお顔、お言葉に、当時を懐かしみながらお読み頂ければ幸いです。

### 歲月人を待たず

理工学研究科

(地球環境学科 / 地球環境防災学科)

有賀 善和



二〇〇七年十一月に着任してから今日まで、大変お世話になりました。大学卒業後、約四十年間、一度も大きなケガや病気をすることなく、土木工学、地震工学の分野で継続的に働くことができ、とても恵まれていたと実感しています。また、振り返れば、六十五年がアツという間で、「歲月人を待たず」を痛感しています。

着任して間もなく、二〇〇八年六月には岩手・宮城内陸地震、二〇一一年三月には東北地方太平洋沖地震が発生しました。3・11の時は学科長でしたので翌日に予定されていた後期日程入試の対応や学科の全学生の安否確認等で気を揉んだことを思い出します。最近では、御嶽山噴火や

熊本地震が発生し、その都度、「防災の実現に役立つことを一生懸命にやれ」と自然から尻を叩かれていました。防災に関しては、後の祭り、後講釈を無くすことが肝要であり、そのためには、事が起きてからではなく事が起きる前に何が起きるかを見えるようにすることが必要と考え、これまで、三次元的解析を主に据えて、地面が波打つような大地震の際に構造物や施設に何が起きるかを見えるようにするための研究を重ねてきました。

本学に來た際に不思議に思ったことが少しありました。一つは、研究が細分化・断片化されていること、もう一つは、理工学部を卒業して事務系の職に就く学生が少なくなかったことです。前者に関しては、防災を実現するには「高い山の裾野は広い」(高い専門能力と共に幅広い総合能力を併せ持つ)という発想が必要不可欠だと思います。研究の効率を優先させると研究の細分化・断片化が起きるように思います。技術の細分化・断片化は災害の遠因になるように思います。後者に関しては、理工学部の使命は、技術

者を育成し技術者として活躍できる職場に学生を送り出すことと思っていました。とても違和感を覚えました。そこで、自分の身の回りから、男・女、官・民を問わず、技術職での就職を学生に働きかけてきました。その結果、この数年來は、研究室の学生は女子も男子もみんな土木工学分野の技術職(土木職、正規)として就職するようになりました。また、自分の研究室のみならず、他の研究室や地質学、気象学の分野の学生も土木関連分野の技術職として就職する学生が増えてきました。研究室の学生が自分と同じ分野に就職すると、卒業後も同じ土俵の上で学生の活動を目にする事ができるので、これからの活躍がとても楽しみです。

若い頃は、縁(えん)というものに無頓着でしたが、最近では、縁をよく感じるようになりました。弘前に來られたこと、学生が研究室を選んでくれたこと等、こうしたことの一つひとつに縁を感じます。これまでに、入試主任、就職対策委員長、副研究科長の仕事を経験させていただき、進学相談会や出前講義等

の機会に多くの高校生や企業の方々と接することができたのも縁であり、楽しい思い出を多く得ることができました。大学の变化・変革が強求められている時期に執行部の仕事に参与させていただけたことも、とても良い思い出になりました。"枯れ木も山のにぎわい"的な役割も果たせなかったと思いますが、理工学部の改組も実行され、地球環境学科も地球環境防災学科になり、これからの発展をとっても楽しみにしています。

これからの少子高齢化の時代は、技術者の減少と老朽化した構造物の急増の時代になると思います。こうした時代には、技術の継承不足や経験不足による技術の退化、空洞化が懸念されます。そのため、質の高い技術者の育成が、より一層重要になると思います。技術者の育成と輩出は、理工学部・理工学研究科の必須の使命であり、今後の益々の発展と活躍を心より祈念しています。これまで、どうもありがとうございました。



## 理工融合・文理融合 から文武両道へ

理工学研究科  
(知能機械工学科/  
機械科学科)  
飯倉善和



テニスを始めて四十一年になります。十七年前、弘前大学に赴任した時、まさきに昼休みの第一体育館を覗きました。半分がテニス、もう半分でバドミントンをやっていました。テニスは教員が主で、バトミントンは職員が主でした。私は早速テニスに参加させてもらいました。夏の夕方には、体育館だけでなく、屋外のテニスコートも使いました。自分たちでコートを整備したので愛着もわきました。今は駐車場になっていました。テニス仲間と冬には体育館を持つ宿泊施設で合宿を行い、飲み明かしたことが思い出されます。

このような雰囲気は年々失われています。テニス仲間が定年を迎えるなどして、一人

二人と去っていききました。職場の時間管理が厳しくなったためか職員の参加も難しくなってきたようです。バドミントンはついに消滅しました。一年前までは十二時四十分にはテニスを体育の授業に譲らなければならぬ曜日がありましたが、今は体育館は寒々としています。

昼休みに運動することに対して批判的な意見を持つ方もいらっしやるかもしれません。私も肩身が狭く感じられることがあります。そんな時ある雑誌で「脳力を上げる運動の効果ーやる気をだすにはどうすればいい?」というタイトルの記事を見つけました。うつ病の患者が有酸素運動をしたら病状が改善し、しかも再発が8%に押さえられたというのです。薬で改善した場合には三八%の再発でした。アメリカでベストセラーとなったジョン・J・レイティ著「脳を鍛えるには運動しかない」では最近の脳科学の成果をふまえて運動の効果をこれでもかというほど紹介しています。

私はこれだと思いました。というのは学生の就職に携わっているとき、どのような人

材を社会が求めているかを企業の方から聞く機会がありました。その中でインテリジェンス(知識・知性)よりもコンピテンンスが重要であるという話に特に共感を覚えましたが、コンピテンンスを日本語に訳すのは難しいのですが、「やる気」+「誠実さ」と理解しました。しかし、コンピテンンスを教師として学生に身につけさせるにはどうしたらよいか?本を読んでも答えが得られませんでした。そこで「身体を動かすことを奨励する」が一つの対策ではないかと思つたのです。運動に加えて以下の二つの対策にも思い至りました。(1)教員がコンピテンンスを示す。コンピテンンスには伝染性があります。(2)達成感を得られるような適度な課題を与える。脳内ホルモンの分泌が刺激されるそうです。

今、昼休みのテニスには学生も参加してくれるので、ダブルスができます。また、体育館の半分では私の学科の学生がバスケットボールをやっています。傍で見ているものの上達ぶりは目を見張るものがあります。大学でも、運動を奨励するようになってくれ

ればと願っています。最近、私は心拍計を手に入れました、ただの心拍計ではなく、時計はもろろんGPSもついており、水泳にも使えます。パソコンやスマートフォンに繋げてデータの管理もできます。退職後はトレーニングの計画を立ててマラソンやトライアスロンに挑戦しようと思

を膨らませています。さて、標題の文武両道は現代風に解釈すれば勉強とスポーツを両立させようということになるかと思つています。理工融合・文理融合については、理工学部の就職対策委員長として昨年の同樹会報に「理工系に必要な人文社会系の知識とは?」という拙文を寄稿しました。要約しますと、(1)マーケティングなどのデータに基づく実証的な分析が適用されてきていること、(2)従来、哲学などで取り扱われていた「心」や「意識」が科学的に取り扱われるようになったこと、(3)再現性のない事象に対しては、歴史や文学から学ぶしかないこと、になるかと思

います。バックナンバーをネット上(同樹会ホームページ)で見られるようですので、ご一読頂ければ幸いです。

読頂ければ幸いです。

### 科学鑑定に果たす 研究者の役割

理工学研究科  
(知能機械工学科 /  
機械科学科)  
伊藤 昭彦



大学を卒業してから、九州大学、大分大学を経て、一九九九年四月に、理工学部の新設された知能機械システム工学科(現 機械科学科)に赴任しました。南から北への大移動でした。それ以来、教育は主に流体力学を、研究は固体や液体などの凝縮相燃料の基礎燃焼に携わってきました。その間の大学生活で、予期せぬ出来事を経験しまし

た。科学鑑定です。弘前に来てまもなく、消費者金融「武富士」での放火殺人事件が発生しました。ガソリンのような液体が使われたことで、この放火について燃焼学の立場から解説した記事が「東奥日報」に掲載されました。地方新聞での記事と高を括っていたの

ですが、時はすでにインターネットの時代でした。火災や放火に関わる民事、刑事事件の鑑定依頼が押し寄せてきました。民事事件はまだしも刑事事件は責任が重大です。大学に身を置く研究者としての立場から、刑事事件の鑑定にはいつも二の足を踏んでしまいます。しかし、明らかに科学的におかしいと思える事でも一旦起訴されると有罪になる公算が高く、俗に言われる九九・九%の有罪率は事実です。とりわけ、自供があると有罪の確率は決定的となりま

す。そのような法曹界の中にあつて、大阪寝屋川放火事件、広島介護士放火殺人事件、大阪東住吉事件などは、自供があつた事案でしたが、自供の内容と放火の機序が科学的に符合しないことを明らかにし、いずれも無罪となりました。とりわけ、再審となつた東住吉事件は、鑑定実験から十年の歳月を要しましたが、定年を前に一区切りがつかました。しかし、燃焼に関わる科学鑑定が正當に評価されるには、まだまだ多くの時間を要します。専門的な知識をもつ研究者の役割は重要です。昨今、大学の教育・研究は

いろいろと制約が多くなりましたが、それでも大学は自由な発想のもとで学問をする場であることには変わりありません。これからもそのような環境が維持されることを願っています。

### 十三年間を 振り返って

理工学研究科  
(知能機械工学科 /  
機械科学科)  
小野 俊郎



一泊キャンプです。これは着任翌年から始めました。研究室の中心テーマである薄膜プロセスを維持し継続していくには、個人が多くの役割を分担し、かつ、お互いに協力して次代に引き継いでいくことが必須となります。このため、キャンプをプロジェクトマネージャメントの一環とみだてて始めたものです。バンガロー設備などを利用し、食物だけ持ち込んであとは現地の道具を使うこととし、往復の交通やいろいろなケースを想定して予算内で実行します。計画は五月連休の桜花見明けから少しずつ進めます。

今年度で連続十二回になりました。ここ数年は教職員、学生あわせて四十名以上の参加を得ます。幹事は伝統的に四年生が担当します。宿泊先や雨天時も考えたレクレーション、食事作りの分担など、時系列に予定表を作成し、担当者を割り当てます。最近は少子化、小家族化、個室化など、学生は集団での生活習慣が希薄です。毎年五月のスタート時には不安を覚えるのですが、八月には

思い出深いエピソードの残る催しとなります。学生のポテンシャルを感じさせてくれる一コマです。この実績は秋以降の卒業研究や修士論文研究を加速するのに多いに役立ちました。学生の卒業、修了は、少しばかりの私のアドバイスと、学生相互の協力が功を奏した結果といえます。遊びの中から学び育てる、私の着任時の思いつきが、学生の活力のおかげで真つ当な結果を残してくれました。大きく成長する学生の姿を「その場観察」できた、何にも代え難い思い出です。



2016年度 医用講座キャンプ (鱈ヶ沢)

### 就職活動の

## 基本キーワード

平成二十八—二十九年度  
理工学部就職対策委員会委員長

榊 真

就職ガイダンスで必ず出てくる基本的なキーワードとして、(1)「B to C」や「B to B」、(2)自己分析、(3)コミュニケーション力、の三つがあります。

「B to C」は「Business to Consumer」の略で、「生産者対消費者」の仕事、「B to B」は「Business to Business」の略で「生産者対生産者」の仕事のことです。消費者の水際にある「B to C」型の仕事は目立ちますが、多くの仕事は「B to B」型であり、普段目にする機会が少ないです。例えば、スーパーの店頭やレジ、銀行や市役所の窓口、テレビのコマーシャルなどを見ても、その後ろに控えているはずの組織構造、社会的構造は全く見えてきません。ですから、目立たなくて多い「B to B」型の仕事を知ることが、就職活動をする上での第一歩となります。民間企業、教員、公務

員その他どんな仕事でも表面的イメージに惑わされたいことが肝心で、そのためには学業でも普段の生活の中でも、表面的には見えない「深さ」と「広さ」を獲得しようとする姿勢が重要です。これは社会人になってからの学び方、成長の仕方にも大きく関係してきます。

二番目のキーワードの「自己分析」は、表面的な経験や結果ではなく、プロセスの分析が中心となります。水面下の仕組みやプロセスを知ることが次に繋がる、というのが基本的な考え方です。成功してもプロセスが分かっているなければ次に繋がらず、失敗してもプロセスが分かっているれば次に繋がる、ということですので、表面的な結果と評価とが逆転することがあり得ます。三年とか五年ではなく、何十年も社会人として学び続けることを考えれば当然の考え方も言えますが、そうは言っても失敗から目をそむけず直視するというのは、心理的に相当ハードな作業になります。また、プロセスの周りの環境の分析も必要です。人間、神様ではありませんが、環境依存性がない

人はいないはずですが、だからと言って、一〇〇%環境次第という人もいないはずで、環境によって、プロセスの持つ意味合いがまるつきり違ってきますので、環境分析までする必要があります。

三番目のキーワードは「コミュニケーション力」です。表面的には、「エンタリーシートで「書く」、面接で「話す」という部分が目につきますが、前提として、「聞く」「人を理解しようとする姿勢」が問われます。表面的な会話力や形の問題ではないです。例えば、コミュニケーション力が高いと称する人が、コミュニケーション力が高いと称する人と称する人とコミュニケーションができない場合、コミュニケーション力があるのかないのか、というようなトレードロジック的な問題があり、必ず相対的な要因が入ってきます。言葉だけでコミュニケーションが成り立っているわけではなく、非言語系のコミュニケーション力も大事です。また、二者のコミュニケーションと三者以上のコミュニケーションは、「聞く」という作業が異なるため、別物であることにも注意が必要です。

これらのキーワードの考え方は就職活動の時だけでなく、社会人になってからも通用します。就職ガイダンスや企業の求人の方との面談で、上述と関連する話題が出てくると、自分のこととして考えさせられる部分がたくさんあることに気が付きます。社会人になる前の大学生にとっては大変な作業だと思えますが、学内外を含めての普段の学びから何を吸収するか、何を学び取るかが、就職活動でも社会人になってからも必ず活かってくるはずで、

さて、平成二十七年度の就職状況について、大学全体の就職率は九八・四%と過去最高を記録し、理工学部全体では九・四%（図1）でした。就職・進路の分布状況は表1、表2のとおりで様々な業界で社会人としての新たなスタートを切っています。これから

も高い就職率を維持し一人一人の学生が納得の就職先を得られるようサポートしていく所存ですので、今後ともよろしく願い申し上げます。

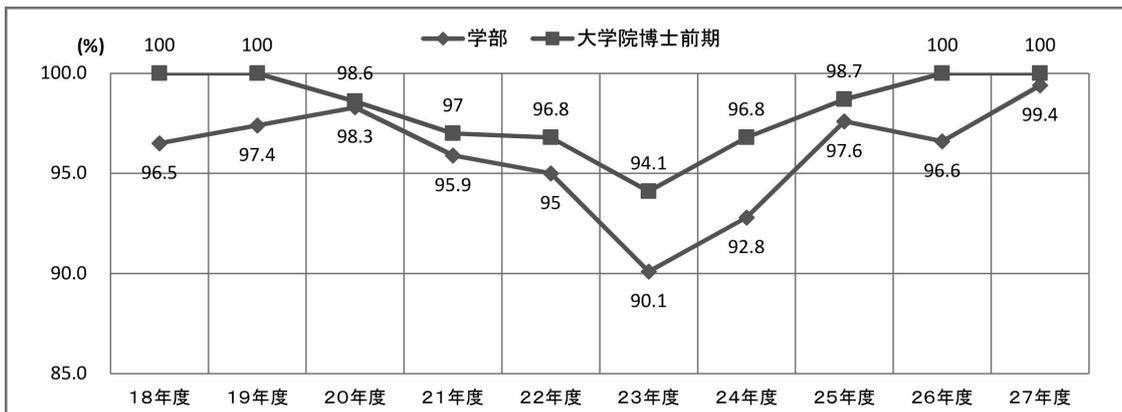


図1 理工学部の就職率の推移(平成18—27年度)

表1 平成27年度(平成28年3月)理工学部卒業生の進路集計

	数理科学 科	物理科学 科	物質創成 化学科	地球環境 学科	電子情報 工学科	知能機械 工学科	合計
進学	8	13	21	14	27	34	117
農業・林業	1						1
建設業	1		1	4	1	2	9
製造業		5	10	2	6	10	33
電気・ガス・熱供給・水道業	1	1		1		1	4
情報通信業	5	2	2	5	12	3	29
運輸業・郵便業	1			1			2
卸・小売業	3	3	2	1	2	1	12
金融・保険業				3			3
不動産業							
飲食店・宿泊業			1				1
医療・福祉				1			1
公務員	3	7	2	14	5	4	35
教員	7	3					10
その他の産業	4	2	1	5	1	3	16
未就職	0	0	0	0	1	0	1
その他	2	1	1	4	1	2	11
計	36	37	41	55	56	60	285

表2 平成27年度(平成28年3月)大学院博士前期課程修了生の進路集計

	数理科学 コース	物理科学 コース	物質創成 化学コース	地球環境学 コース	電子情報 工学コース	知能機械 工学コース	新エネルギー 創造工学 コース	合計
進学	0	2	1	0	0	0	2	5
建設業	0	0	0	0	0	1	0	1
製造業	0	2	16	0	7	23	0	48
電気・ガス・熱供給・水道業	0	1	0	0	1	1	0	3
情報通信業	0	2	0	3	7	2	0	14
運輸業・郵便業	0	1	0	1	0	0	0	2
卸売業・小売業	0	1	0	0	1	0	0	2
医療・福祉	0	1	0	0	0	0	0	1
教員	1	1	0	0	0	0	0	2
公務員	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の産業	0	0	1	3	1	3	2	10
未就職	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	0	0	0	2	0	1	5
計	3	11	18	7	19	30	5	88

紙上職場訪問(9)

地方でも  
最先端の仕事を

(株)野村総合研究所  
札幌開発センター  
地蔵拓也

(平成十九年 理工学部  
電子情報システム工学科卒業)

同樹会会報第十七号発行に  
あたり、お慶び申し上げます。  
私は現在からちようど十年  
前の二〇〇七年三月に理工学  
部電子情報システム工学科を  
卒業いたしました。当時の新  
卒採用を取り巻く環境は売  
り手市場であり、周囲の皆お  
おむね志望していた就職先か  
ら内定を得ていたと記憶して  
おります。私は、専攻を活か  
せるシステムエンジニア職を  
志望し、かつ地元の北海道で  
仕事をしたい思いからN E C  
ソフトウエア北海道(当時。  
現 N E C ソリユーシヨイン  
ノベータ)に就職いたしました。  
しかしながら、就職後の  
実際の働き方としては首都圏  
での勤務(出張や転勤)が多  
く、地元で働いて地元を貢献  
することが実現できないもど

かしさがありました。  
そのような中で私が一番感  
じたのは、システムエンジニ  
アが作り出す「モノ」、すな  
わちアプリケーションソフト  
ウェアは「作る場所を選ばな  
い」ものである、という事  
です。なぜなら、最終的な成果  
は「デジタルデータの集合」  
であって物理的な形を有して  
おらず、納品先、顧客への搬  
送はインターネットで瞬時に  
行える世界にあるからです。  
このような思いから、私は  
より地元への貢献ができる場  
を求め、転職を決意いたしま  
した。そこで二〇一四年四月、  
縁あって(株)野村総合研  
究所 札幌開発センターに就職  
いたしました。  
野村総合研究所(以下、N  
R I)は日本初の民間シンク  
タンクである野村総合研究所  
と、システムインテグレーター  
の草分けである野村コンピュ  
ータシステムの合併によって生  
まれました。首都圏に主な拠  
点がある会社ですが、札幌開  
発センターは一九九七年六月  
に開所し、設立当初から首都  
圏の重要案件を手掛け、その  
実力はクライアントからも高  
く評価されてきました。特に  
「開発力」を強みとして、分  
野を問わず各事業部と協働し

て多様なお客様のシステムの開発・保守を手掛けています。さらに、NRI製生産革新ツールの提供・活用のサポートを通じて、事業部が担当するシステム開発を成功に導く役割も担っています。

私は「エリア職システムエンジニア」として、転勤の無い形態で従事しています。このため、勤務地について不安を抱くことがなく、仕事に集中できる状態です。遠隔地の仕事ではコミュニケーションが課題になりますが、NRIには、時間・場所を問わず連絡が取れる環境、テレビ会議室やオンラインチャットなどのインフラが整っていることで、その心配もありません。現在はシステム開発の効率化・生産性の向上を担うフレームワーク製品の開発・保守を担当しています。業種を問わず、幅広いお客様に提供するシステムの根幹を支える基盤であるため、品質の高いものが求められます。また、ユーザからいただく要望も多く、限られた時間で最適な製品に仕上げていくために、メンバーやユーザとのコミュニケーションを大切にし、技術に裏打ちされた設計・開発・テストを遂行して必要があります。

もちろん難しさもありますが、一人ではできないことをみんなで築き上げていくことに、とてもやりがいを感じています。

IT技術は日進月歩ですが、現在の職場にはそれに追随するマインドが個人・組織を問わず醸成されていると感じます。例えばシステムを設計する際、メーカーだと自社製品を組み合わせる場合が多く自由度が限られますが、NRIではその縛りがなく、加えて「時代先取り」のDNAが浸透していますので、最新技術や最適なソリューションを広く取り入れる点がとても刺激的です。

弘前大学理工学部出身者として、地方活性化は非常に重要な関心事です。地方で最先端の仕事ができる環境を拡大していきたいと、地方活性化の一翼を担う気概を持って今後も邁進いたします。



## 平成二十七年度 理工学部卒業・理工学研究科修了 祝賀会

平成二十八年三月二十三日、平成二十七年度理工学部卒業・理工学研究科修了祝賀会を開催いたしました。今回は例年と会場を変え、初めて大会館二階のスコーラムでの開催となりました。近年の参加者の下降傾向を打開する期待も込めて、参加者が気軽に参加できるよう会場を変えましたが、残念ながら増加には転じず非常に寂しい思いです。

私は平成十二年に理学部を卒業しましたが、当時は周りの友人も大多数が祝賀会に参加をしていたと記憶しています。卒業から十五年以上が経つ今でも大切な思い出の一つとなっています。現在、私は縁あって弘前大学生協に勤務しており、数年前に食堂の担当として祝賀会を担当させていただきました。そのとき初めて卒業生・修了生の参加が五十人を割っていることを知りショックをうけました。

祝賀会はお世話になった先生方、ともに卒業研究に励んだ仲間と顔を合わせ、語らう最後の機会です。このまま下降傾向が続けば、学科を超えて集う大切な機会を失くさざるを得ない状況になるかもしれません。卒業生としても生協職員としても、なんとか大学生活最後の記念に多くの卒業生・修了生が参加し、そして、その後社会に出ても、各自の意識の中に同窓のつながりの大切が根付く、そんなきっかけの場になって欲しいと思います。同窓の皆様にも知恵をお借りしながら、祝賀会の再構築ができればと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、祝賀会準備及び開催にご協力いただいた理工学部教職員関係各位に感謝申し上げます。

同樹会幹事 芹田 美穂子  
(平成十二年 理学部地球科学科卒業)



# 学生表彰

理工学部学生、理工学研究科大学院生は、日々研究活動に努力しています。特に、学会等からの表彰を受けた学生は以下のとおりです（平成二十八年二月以降）。今後とも学生の活躍にご期待ください。

- 理工学研究科博士前期課程（新エネルギー創造工学コース）  
曹サイ（二年）  
化学工学会第八十一年会  
学生奨励賞を受賞。
- 理工学研究科博士前期課程（地球環境学コース）  
齊藤司（一年）  
日本農業気象学会二〇一六年全国大会 優秀ポスター賞を受賞。
- 理工学研究科博士前期課程（知能機械工学コース）  
玉井捷太郎（二年）  
二〇一五年度精密工学会秋季大会学術講演会 優秀研究奨励賞を受賞。
- 理工学研究科博士前期課程（電子情報工学コース）  
小林徹哉（二年）  
平成二十七年電気学会東北支部 優秀論文賞を受賞。

■理工学部電子情報工学科  
成田佳樹（三年）  
平成二十八年度ヤマト福祉財団奨学生に選出。

■理工学研究科博士後期課程  
Patchiya Phanthong（三年）  
化学工学会第四十八回秋季大会 優秀ポスター賞を受賞。

■理工学研究科博士前期課程（物質創成化学コース）  
中川雄太（一年）  
妻島大輝（一年）  
平成二十八年度化学系学協会東北大会 優秀ポスター賞を受賞。

■理工学研究科博士後期課程  
及川祐梨（二年）  
アメリカ化学会ポリマー部会フルオロポリマー二〇一六国際会議 最優秀ポスター賞を受賞。

■理工学研究科博士後期課程  
Arissara Ratcha（二年）  
アメリカ化学会ポリマー部会フルオロポリマー二〇一六国際会議 優秀ポスター賞を受賞。

■理工学研究科博士後期課程  
関口龍太（三年）  
The Bulletin of the Chemical

Society of Japan にBCSJ Award Articleとして掲載。

■理工学研究科博士前期課程（知能機械工学コース）  
菊池大樹（二年）  
ICAESE 2016 Best Student Paper Award in the area of Micro and Nano Electronics を受賞。

■理工学研究科博士後期課程  
小笠原悠（三年）  
平成二十八年度東北ORセミナー若手研究交流会 学生優秀発表賞を受賞。

■理工学研究科博士前期課程（物質創成化学コース）  
川井勇斗（一年）  
電気化学会東北支部第二十九回東北若手の会 優秀発表賞を受賞。

■理工学研究科博士前期課程（電子情報工学コース）  
板垣威亮（二年）  
電気化学会東北支部第二十九回東北若手の会 優秀発表賞を受賞。

■理工学研究科博士後期課程  
Surachai Kanjanakom（二年）  
The 29th International Symposium on Chemical Engineering 優秀発表賞を受賞。

■理工学研究科博士後期課程  
The 29th International Symposium on Chemical Engineering 優秀発表賞を受賞。

## 「吉田基金」 TOEIC賞受賞

弘前大学同窓会では、平成十四年より国際化教育の支援を目的として、吉田豊元学長が設立なさった基金のもとに「吉田基金」TOEIC賞を制定しています。この賞は、TOEICの高得点者（九九〇点満点中九九〇点以上）を対象とし、審査の上で賞状と副賞を授与するものです。本年度、理工学部四年の中田啓一さんが見事九二〇点のスコアで授賞し、平成二十九年二月一日に授与式が行われました。授与式後に中田さんから喜びの声を伺いました。

### 「吉田基金」 TOEIC賞を 受賞して

理工学部電子情報工学科四年  
中 田 啓 一

私が初めてTOEICを受験したのは一年生の時で、結果は四四五点と極めて平々凡々でした。更には、基礎英

語という低レベルの英語のクラスに配属されていた為、私の英語学習は決して英語が得意とは言えない状態から始まりました。そんな私が、大学生活の最後をこのような誉れある形で飾る事が出来た事、大変感慨深いものがあり、私自身も驚いています。英語を勉強する事で、私の大学生活は一八〇度変わりました。そしてそれは、私の将来に関しても同様に言えると思います。今後も英語の勉強は継続していきませんが、英語を目的ではなく手段と捉え、理系として大学院で専門知識を身に付けていきたいと思っています。



右…加藤博雄（理工学研究科長）  
中央…中田啓一さん  
左…千葉信行（同樹会長）

### 平成27年度 弘前大学理工学部同樹会決算書

平成28年 3月31日

◎収入の部

(円)

項目	予算額	決算額	差額	摘要
繰越金	8,631,707	8,631,707	0	平成26年度より
会費	3,480,000	1,340,000	△ 2,140,000	正会員 133人 学部 1年(28年度入学) 69人 690,000円 " 1年(27年度入学) 39人 400,000円 " 2年 3人 30,000円 " 3年 1人 10,000円 " 4年(祝賀会時納入1人分含) 13人 130,000円 既卒 1人 10,000円 院生 1年 2人 20,000円 " 2年(祝賀会時納入1人分含) 5人 50,000円 " 後期課程 0人 0円
卒業・修了祝賀会当日会費納入分	0	95,000	95,000	学生 6人 15,000円 教員等 32人 80,000円
雑収入	200	10,077	9,877	預金利息(77)、理学部・理工学部創設50周年記念事業費返戻(10,000)
計	12,111,907	10,076,784	△ 2,035,123	

◎支出の部

(円)

項目	予算額	決算額	差額	摘要
弘前大学同窓会費	210,000	210,000	0	平成27年度負担金
印刷費	340,000	351,216	11,216	会報第16号 2,000部(324,000円) 会報第16号差込1頁印刷代 1,500部(13,500円) 会費払込取扱票印刷 2,000枚(13,716円)
卒業・修了祝賀会費	270,000	307,896	37,896	卒業・修了祝賀会経費(212,896円) 卒業・修了祝賀会当日会費(95,000円)
写真代	55,000	29,484	△ 25,516	卒業・修了祝賀会記念写真代
通信・運搬費	50,000	29,160	△ 20,840	加入案内送料(研究科新入生)(3,570円) 未加入者へ加入案内送料(学部4年)(23,268円) 会報送料他(2,322円)
会議費	10,000	6,645	△ 3,355	農学生命科学部創設60周年記念祝賀会御祝金他
事務費	120,000	120,000	0	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消耗品費	20,000	7,304	△ 12,696	フラットファイル、プリンターラベル
郵便振替払込料	19,500	15,230	△ 4,270	会費払込手数料(131人)
予備費	11,017,407	8,999,849	△ 2,017,558	理学部・理工学部創設50周年記念事業支援(706,511円) 次年度以降経費引当金を含む(8,293,338円)
計	12,111,907	10,076,784	△ 2,035,123	

### 平成28年度 弘前大学理工学部同樹会予算書

平成28年 4月1日

◆一般会計

◎収入の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
繰越金	3,293,338	3,131,707	161,631	平成27年度より
会費	1,500,000	3,480,000	△ 1,980,000	正会員 150人×@10,000円 学部 1年 110人 " 2年 5人 " 3年 5人 " 4年 25人 院生 5人
雑収入	200	200	0	預金利息
計	4,793,538	6,611,907	△ 1,818,369	

◎支出の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
弘前大学同窓会費	252,000	210,000	42,000	平成28年度負担金
印刷費	340,000	340,000	0	会報17号 2,000部×@170円
卒業・修了祝賀会費	270,000	270,000	0	100人×@2,700円
写真代	55,000	55,000	0	卒業・修了者祝賀会記念写真代 100人×@550円
通信・運搬費	50,000	50,000	0	加入案内送料(研究科新入生) 100人×@92円 加入案内送料(学部学生4年) 250人×@120円 会報送料他(10,800円)
会議費	10,000	10,000	0	
事務費	120,000	120,000	0	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消耗品費	20,000	20,000	0	プリンターラベル、ドッチファイル他
郵便振替払込料	19,500	19,500	0	会費払込手数料 150人×@130円
予備費	3,657,038	5,517,407	△ 1,860,369	
計	4,793,538	6,611,907	△ 1,818,369	

◆特別会計

◎収入の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
繰越金	5,000,000	5,500,000	△ 500,000	平成27年度より
雑収入	200	0	200	預金利息
計	5,000,200	5,500,000	△ 499,800	

◎支出の部

(円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
特別事業他	0	500,000	△ 500,000	
予備費	5,000,200	5,000,000	200	
計	5,000,200	5,500,000	△ 499,800	

編集後記

平成十七年度より幹事(会計担当)を務めております一條です。

一面の山上先生、また二々四面のご退職の先生方のご寄稿から、特別な外部セミナーに参加せずとも、大学における教員・学生らの普段からの緊密な親睦や議論を通して、社会人基礎力を十分に高められることをお読みいただけたと思います。

またご退職の先生方のご寄稿から、大学は社会の要請に応えながらも、そのために研究を細分化することなく、自由な発想で学問をする場であることを改めて教えていただきました。

五面の桝就職対策委員長のご寄稿は、就職活動中は元より活動前の在学生ならびに保証人の皆さまに是非とも読みいただきたい内容です。また将来、地域活性化や地方での活躍を志す在学生には、六面、NRIの地蔵様のご寄稿が大変参考になると思います。

最後に、本号のご寄稿ならびに同樹会運営にご協力いただいた皆さまに、この場を借りて感謝申し上げます。

役員一覧

- 会長 千葉 信行
- 副会長 山上 佳男
- 幹事 一條 健司 (理工学研究科助教)
- 監査 荒木 宏孝 (弘前大学生協同組合職員)
- 須藤 勝弘 (理工学研究科教育研究支援室)
- 名誉会長 加藤 博雄 (学術情報部情報基盤課技術専門職員)
- 顧問 宮永 崇史 (理工学研究科長)
- 吉澤 篤 (前理工学研究科長、企画担当・副学長)
- 稲村 隆夫 (元理工学研究科長)
- 南條 宏肇 (弘前大学名誉教授)
- 本瀬 香 (弘前大学名誉教授)

事務局

弘前大学大学院理工学研究科 一條 健司  
 住所：〒036-8561 弘前市文京町三  
 電話：0172-39-3660  
 E-mail: ken@eit.hirosaki-u.ac.jp  
 URL: http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/~doju/